様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０２５１

研究課題名（和文）『源氏物語』を中心とする平安文学の古注釈と受容に関する研究

研究課題名（英文）Study on old commentaries and reception of Japanese Heian Literature with special emphasis on Genji monogatari

研究代表者
陣野　英則（Jinno, Hidenori）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：４０３３９６２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では『源氏物語』の古注釈に関する研究、ならびに『源氏物語』をふくむ平安時代文学のさまざまな受容に関する研究に取り組んできた。特に、研究協力者とともに『長珊聞書』（陽明文庫蔵）の調査と翻刻作業を進めた。加えて、早稲田大学図書館所蔵の未翻刻資料『源氏物語注』などの翻刻を行った。
　また、海外における受容を特集した論集１冊を刊行するとともに、『伊勢物語』の古注釈、『枕草子』などの本文の変容、それに近代の『源氏物語』受容に関する論文などをまとめた。

研究成果の概要（英文）：　I have conducted research on old commentaries of Genji monogatari, and on various receptions of Heian Literature. Especially, we have investigated and reprinted Chosan Kikigaki which is in Yomei Bunko's possession. Additionally, we have reprinted Genji monogatari-chu which is in Waseda University Library's possession, and so on.
　On the other hand, we compiled a collection of papers on receptions in Europe and America. And I have investigated old commentaries of Ise monogatari, different texts in Makura no Soshi, and reception of Genji monogatari in modern novels.

研究分野：日本文学

キーワード：源氏物語　平安文学　古注釈　受容　長珊聞書　伊勢物語　枕草子

１．研究開始当初の背景

本研究は、以前の科学研究費補助金による二つの研究プロジェクト、すなわち「『光源氏物語抄（異本紫明抄）』を中心とする中世の源氏物語古注釈の研究」（若手研究(B)、平成 15～17 年度）、ならびに「『長珊聞書』を中心とする中世の源氏物語古注釈の研究」（基盤研究(C)､平成 19～22 年度）を踏襲し、より発展させようとするものである。したがって、これら二つのプロジェクトによる成果が、本研究の開始当初の背景に相当するだろう。おおよそ、以下の三点が主な背景といえる。

(1)　上記の二つのプロジェクトでは、中世（鎌倉～室町時代）に成立した『源氏物語』古注釈書についての研究を軸に据えてきた。具体的には『光源氏物語抄（異本紫明抄）』の注記内容の検討から出発し、未翻刻の重要な古注釈書の発掘・調査に取り組みはじめた。特に室町末期に成立した『長珊聞書』全 53 巻（陽明文庫蔵）の基礎的な書誌の調査から、その翻刻作業の体制づくりに取り組み、全体の四分の一にあたる部分の翻刻作業を進行させた。また、早稲田大学大学院文学研究科の出身者と大学院生を中心メンバーとする古注釈の研究会での成果として、未翻刻の『源氏物語』古注釈書である『源注』（肥前嶋原松平文庫蔵）の翻刻作業を完了させた。

(2)　『源氏物語』古注釈をふくむ平安時代文学のさまざまな古注釈と受容の研究の深化・発展を促進すべく、活躍中の研究者の論考、及び未翻刻の関係資料の翻刻を掲載する論集として、陣野英則・横溝博編『平安文学の古注釈と受容 第一集』及び陣野英則・新美哲彦・横溝博編『平安文学の古注釈と受容 第二集』を武蔵野書院より刊行した。なお、先述の『源注』の翻刻は、この『平安文学の古注釈と受容 第一集』に掲載した。

(3)　上記の研究プロジェクトの進行中に、中野幸一・早稲田大学名誉教授が所蔵されていた九曜文庫の貴重書の大半が早稲田大学図書館に収蔵されることとなった。そこで、九曜文庫本の中でも、『源氏物語』古注釈などで特に注目すべき貴重書の調査にも取り組みはじめた。

２．研究の目的

(1)　室町時代末期に成立した、未翻刻の『源氏物語』古注釈『長珊聞書』の翻刻とその内容に関する研究に取り組む。

(2)　特に早稲田大学図書館の蔵書（九曜文庫本をふくむ）を中心に、さまざまな未翻刻の古注釈書の翻刻・紹介に取り組む。

(3)　中世の『源氏物語』古注釈の中でももっとも利用される機会の多い『河海抄』の場合、諸本の異同がかなりみられることから、未紹介の九曜文庫本『河海抄』などの調査・検討を進め、『河海抄』の多様な本文の把握に努める。

(4)　『伊勢物語』『枕草子』など、『源氏物語』以外の平安時代文学に関する注釈、受容、本文の変容などについて積極的にこれまでの研究を更新すべく取り組む。

(5)　近現代における平安時代文学の受容と変容についての検討を通じて、古典文学の再生とその意義について考える。

(6)　海外における『源氏物語』の受容に関わる論集を刊行し、よりひろい視野から日本の古典文学のもつ特殊性と普遍性をとらえる。

３．研究の方法

(1)　5 名の研究協力者との共同体制を確立した上で、『長珊聞書』の翻刻作業とそのチェック、また陽明文庫での同写本の調査を行う。正確な翻刻を行う上で、これまで用いてきた紙焼き（モノクロ）では限界があることから、陽明文庫の許可を得て、新たにカラー・デジタル画像の撮影を依頼、DVD を作成して翻刻とそのチェックに取り組む。

(2)　古注釈の研究会のメンバー(上記の 5 名の研究協力者を含む)とともに、未翻刻あるいは未紹介の資料の検討と翻刻を進める。

(3)　『伊勢物語』古注釈の中でも室町期の画期的なものとされてきた一条兼良『伊勢物語愚見抄』の特徴と意義について、注記内容の吟味によってとらえなおす。

(4)　『枕草子』の本文とその変容に関する研究の一環として、甚だしい異同が生じている形容詞「いとほし」とその派生語を例にとりあげ、詳細に検討する。

(5)　近現代の『源氏物語』受容の例として、川端康成作品を例にとりあげ、独特の『源氏物語』受容のあり方について詳細な分析にもとづき検討する。

(6)　海外における『源氏物語』と平安時代文学の受容と最新の研究の例について情報を集めるとともに、その紹介などに努める。

４．研究成果

(1)　『長珊聞書』全 53 巻については、武蔵野書院の「続・源氏物語古註釈叢刊」(仮称)というシリーズ中の４分冊として刊行する予定を組んでいる。これまでのところ、４分冊中の第１分冊に相当する４分の１程度(「須磨」巻まで)の翻刻を完全に終え、さらに研究協力者間の相互チェックも済ませ、順次入稿、校正を進めている。

当初の予定では、さらに第２・第３分冊へと進めるつもりであった。しかし、陽明文庫での調査を重ねた結果、モノクロの紙焼き写真では細かな文字、朱点等をはじめとして、正確にとらえられない情報があまりにも多いということがわかり、研究期間の途上で、精度の高いカラー・デジタル画像の作成を依頼することとした。その結果、ようやく正確な翻刻とチェックを行うことが可能となった。今後はこの画像を利用してできるだけ早く刊行に至るよう努めたい。

(2)　未翻刻・未紹介の『源氏物語』古注釈書で、江戸時代成立の『源氏物語注』(早稲田大

学図書館蔵)を古注釈の研究会の参加メンバーとともに翻刻し、すべての翻刻を終えた。この翻刻については、いずれ公刊する予定である。

(3)　2013 年秋以降、『河海抄』の諸本に注目して上記の古注釈の研究会を展開した。特に、早稲田大学図書館九曜文庫蔵の片仮名書き『河海抄』は大変珍しいもので、まずは「桐壺」巻の本文を主要他本(特に中書本系統の代表的な写本である天理図書館蔵・伝一条兼良筆本)と比較しながら翻刻を進めている。

(4)　中世の『伊勢物語』古注釈の中でも一条兼良『伊勢物語愚見抄』が果たした先駆的役割については従来もたびたび論じられてきたが、あらためてその特徴と意義について詳細に検討した。その結果、兼良は『伊勢物語』を(また『大和物語』をも)『古今集』などの勅撰集と同次元でとらえうるものとみており、基本的には歴史的事実を書き記した作品群としてこれらをゆるやかに括っていると理解された。一方、『源氏物語』の注釈に際して兼良が示している普遍的価値の喧伝といった姿勢は、『愚見抄』の中からは見いだしがたいことも明らかにした。

(5)　『枕草子』の三巻本と能因本とを対比しつつ、本文の変容に関する興味深い事例として、甚だしい異同が生じている形容詞「いとほし」とその派生語を例にとりあげ、詳細に検討した。あわせて「いとほし」の語義がどのように解され、あるいは誤解されていたのか、という観点からも検討を加えることで、能因本系統において特に一貫性が乏しいことなどを明らかにした。

　なお、『枕草子』の受容と変容に関しては、『平安文学の古注釈と受容 第三集』(緑川真知子氏との共編)において特集を組むことができた。

(6)　ベルリン国立図書館蔵の『源氏物語』写本(三条西家本のグループに属する)のうち、特に「夕顔」巻の抹消された異文がかなり特徴的であることについて、2008 年の調査で把握していた。それを受け、2011 年にあらためてベルリンに赴き、「夕顔」巻に特化して調査を実施した。ただし、同図書館の貴重書閲覧が可能な時間帯に制約があったことなどから、全体の調査を終えることはできなかった。これについては、あらためて継続調査の機会をもちたい。

(7)　近現代の『源氏物語』受容のきわめて特徴的な例として、川端康成にとっての『源氏物語』受容について検討を進めた。特に、長篇小説『山の音』と『源氏物語』「宇治十帖」との深い関係について検討した。川端は、講演、随筆などにおいては『源氏物語』に直接言及することが少なくないが、代表的な小説作品においては、あからさまに『源氏物語』を引用したりはしない。『山の音』についても同様である。ただし、仔細に検討してゆくと、特に「宇治十帖」との照応箇所が随所にみられた。『源氏物語』と『山の音』との類似点については先行研究でさまざま指摘されてきたが、「宇治十帖」との深部における照応ということは初めて指摘しえたのではないかとおもう。

(8)　海外における『源氏物語』の受容、ならびに最新の研究動向について研究協力者・緑川真知子氏の全面的な協力を得て、さまざまな情報を集めるとともに、その紹介をすべく、論集『平安文学の古注釈と受容 第三集』(緑川真知子氏との共編)を刊行し、特に欧米における『源氏物語』の受容と変容(メタモルフォーシス)を特集することができた。

(9)　本研究課題に直接対応する研究成果は、以上の(1)〜(8)であるが、それらのほかに、いくばくかの関わりのある研究成果として、次のようなものが挙げられる。

①『源氏物語』古注釈と接点をもつ研究

・『源氏物語』などの物語文学における帝(及び上皇)の葬送儀礼のあり方について、史料などに照らすとともに、中世から現代までの諸注釈を参看して検討した。とりわけ、物語本文中にみえる「御国忌」という言葉をめぐり、物語と歴史との関わりについて考察した。

②『源氏物語』の表現に関わる研究

・『源氏物語』における「ふみ」という言葉の全用例について検討し、特に「文(ブン)」という漢語の概念との関係について考えた。

・この物語作品の語り手のあり方について、待遇表現の特色などに留意しながら論じた(特に「手習」「夢浮橋」巻について)。

・形容詞「いとほし」とその派生語の語義について、また「あはれなり」と「ものあはれなり」との語義の相違点について、それぞれ論じた。

③『源氏物語』成立時期の受容の研究

・『源氏物語』成立当時の作者と近辺読者との関わりに関する推察をもとに、作者の紫式部が「藤式部」として認識されていた可能性が高いことを明らかにし、あわせて物語本文中の「藤式部丞」との対応について検討した。

④『源氏物語』の本文異同に関する研究

・『源氏物語』の本文異同の扱い、さらに校訂の仕方について提言を行った。

⑤『うつほ物語』と『源氏物語』の准拠と方法に関わる研究

・これらの物語作品における「高麗人」、ならびに渤海国の問題をとりあげた。特に『うつほ物語』においては、渤海使節への言及が、帝と学問との関わりの深さを示唆することになる点などをとらえた。

・さらに、『うつほ物語』と『源氏物語』の両作品における学問のあり方についてトータルにとらえようと努めた。

⑥『源氏物語』以降の物語に関する研究成果

・「はいずみ」(『堤中納言物語』中の一篇)について、その諧謔的表現の意味するところを論じた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 陣野英則、藤式部丞と紫式部＝藤式部、文学(岩波書店)、査読無、隔月刊第 16 巻第 1 号、2015、pp. 62-75

② 陣野英則、『源氏物語』の言葉と時空—「ものあはれなり」をめぐって—、國語と國文學(東京大学国語国文学会)、査読有、第 91 巻第 11 号、2014、pp.16-27

③ 陣野英則、『源氏物語』の本文校訂をめぐって—「須磨」巻の「くしとらする」攷—、国文学研究(早稲田大学国文学会)、査読有、第 174 集、2014、pp.1-12

④ 陣野英則、物語文学にみえる学問—『うつほ物語』と『源氏物語』の検討から—、専修大学人文科学研究所月報(専修大学人文科学研究所)、査読無、第 272 号、2014、pp.11-34、http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=52&item_id=7246&item_no=1

⑤ 陣野英則、浮舟と小野の妹尼—「手習」「夢浮橋」の待遇表現から読む—、アナホリッシュ國文學(響文社)、査読無、第 4 号、2013、pp.128-137

⑥ 陣野英則、『源氏物語』の「ふみ」と「文」—「少女」巻の恋文から漢学・漢籍・漢詩まで、アジア遊学 162 日本における「文」と「ブンガク」（河野貴美子・Wiebke DENECKE 編、勉誠出版)、査読無、2013、pp.69-81

⑦ 陣野英則、語り手以前の言葉—『源氏物語』「須磨」巻の場合—、むらさき(紫式部学会)、査読無、第 49 輯、2012、pp.53-57

⑧ 陣野英則、帝の葬送儀礼—桐壺院の「御国忌」をめぐって—、源氏物語と儀礼(小嶋菜温子・長谷川範彰編、武蔵野書院)、査読無、2012、pp.281-302

⑨ 陣野英則、『源氏物語』の作中和歌—歌を詠まない人物に注目して—、世界へひらく和歌—言語・共同体・ジェンダー—(ハルオ・シラネ・兼築信行・田渕句美子・陣野英則編、勉誠出版)、査読無、2012、pp.91-98

⑩ 陣野英則、『堤中納言物語』「はいずみ」前半部の機知と諧謔、源氏以後の物語を考える—継承の構図(久下裕利編、武蔵野書院)、査読無、2012、pp.101-125

⑪ 陣野英則、『山の音』と『源氏物語』「宇治十帖」—錯覚・妄想の世界と永続性—、平安文学の交響—享受・摂取・翻訳—(中野幸一編、勉誠出版)、査読無、2012、pp.486-507

⑫ 陣野英則、『伊勢物語愚見抄』における『伊勢物語』観と「古典」、中世文学と隣接諸学 5 中世の学芸と古典注釈(前田雅之編、竹林舎)、査読無、2011、pp.420-439

⑬ 陣野英則、平安前期から『源氏物語』までの「いとほし」—困惑・つらさをあらわす語としての一貫性—、『源氏物語の展望第十輯』(森一郎・岩佐美代子・坂本共展編、三弥井書店)、査読無、2011、pp.263-300

⑭ 陣野英則、渤海使と平安朝文学—『うつほ物語』の「高麗人」と「おほやけ」、国文学 解釈と鑑賞(ぎょうせい)、査読無、第 76 巻 8 号、2011、pp.60-67

⑮ 陣野英則、『枕草子』の「いとほし」に関わる本文異同—三巻本と能因本の比較検討を中心に—、平安文学の古注釈と受容 第三集(陣野英則・緑川真知子編、武蔵野書院)、査読無、2011、pp.159-188

〔学会発表〕（計 6 件）

① 陣野英則、前近代の和文と漢語(Premodern Japanese Prose and Chinese Words)、NEW HORIZONS IN JAPANESE LITERARY AND CULTURAL STUDIES、2015 年 3 月 13 日、コロンビア大学、ニューヨーク(アメリカ合衆国)

② 陣野英則、『源氏物語』作者の自己言及—藤式部丞と藤式部＝紫式部—、碩学招請講演会、2014 年 11 月 11 日、高麗大学校、ソウル(大韓民国)

③ 陣野英則、『うつほ物語』『源氏物語』の中に見える学問、公開講演会「平安皇朝の国際交流と源氏物語」、2014 年 3 月 6 日、専修大学(東京都千代田区)

④ 陣野英則、平安時代物語文学の本文校訂—『源氏物語』と『うつほ物語』の場合—〈早稲田大学総合人文科学研究センター〉国際日本学共同研究部門 古典テキスト校訂分科会 第 3 回研究会、2013 年 6 月 29 日、早稲田大学（東京都新宿区）

⑤ 陣野英則、『源氏物語』における「ふみ」と「文」、早稲田大学日本古典籍研究所ワークショップ 日本における「文」の世界・伝統と将来、2012 年 7 月 21 日、早稲田大学(東京都新宿区)

⑥　陣野英則、『源氏物語』の「いとほし」があらわす心情（The Psychological State Expressed by the Term "itohoshi" in The Tale of Genji)、The 13th International Conference of European Association for Japanese Studies(EAJS)、2011 年 8 月 25 日、タリン大学、エストニア(タリン)

〔図書〕（計 2 件）

①　ハルオ・シラネ・兼築信行・田渕句美子・陣野英則 編、勉誠出版、世界へひらく和歌—言語・共同体・ジェンダー—、2012、424

②　陣野英則・緑川真知子 編、武蔵野書院、平安文学の古注釈と受容 第三集、2011、250

〔その他〕

ホームページ等

https://www.wnp7.waseda.jp/Rdb/app/ip/ipi0211.html?lang_kbn=0&kensaku_no=1143

６．研究組織

(1) 研究代表者

陣野　英則（JINNO, Hidenori）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：４０３３９６２７

(2) 研究協力者

栗山　元子（KURIYAMA, Motoko）
早稲田大学・文学学術院・非常勤講師

坂本　清恵（SAKAMOTO, Kiyoe）
日本女子大学・文学部・教授

新美　哲彦（NIIMI, Akihiko）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

緑川　真知子（MIDORIKAWA, Machiko）
早稲田大学・文学学術院・非常勤講師

横溝　博（YOKOMIZO, Hiroshi）
東北大学・大学院文学研究科・准教授